

教育の原理に關する佛教哲学の一任務 (一)

正 田 英 肇

一、序説として教育の現状を瞥見する

「教育のバックボーンの確立」。こそは今や世界的な重要問題となつてゐる。自由主義國家群においても、共產主義思想圈においても、夫々の制度や機關を設けて研究と活動を續けて來てゐるが、この二つの勢波の干渉下にあるわが国にとつては一層焦眉の急である事は、言ふまでもない。

ソ連に於ては、革命当初から教育に最大の関心を寄せた。レーニンは、著名な教育家であつた父の影響を受けて、特に教育に熱意を持ち、「国に無学の徒の多い間は、いかなる政治も無効である」との思想に基いて、ビオニール、コムソモールを結成し、学校教育、社会教育を推進したが、その妻クループスカヤも、中央部に教育科学部委員長として活躍し「新しき学校への道」の為に献身の努力を捧げたのである。今日のソ連の中堅階層が、当時のビオニールコムソモールで武士道的だとさえ言はれる教育を受けた、所謂筋金入りの分子である事を思へば、いかに人間形成のバックボーンとして教育が重大なる意義を持つかに思い当るであらう。然らば一応共產主義といふバックボーンが今日もなほ教育の支柱として、ソ連教育界をゆるぎなきものとしてゐるかといふに、やはり現在尙教育も又「闘争の巷」にあるといふ事實は、ソ連建国の当初からまつわる所の因縁といふ外はない。

レーニンが教育に熱意を注いだのは、前述の如く偏々に政治的目的からであり、「労農より文盲を撲滅せよ」といふ階級意識的なものであつた。随つて一時は、シヤツキーが言ふ様に、「我がソ連における世界的大革命は、社会的経済的、政治的生活形態を根本的に変革したのみではなく、教育に偉大なる躍進をもたらせた」のであつたが、その故に又、教育における階級主義の問題は克服され得ずして、それはやがて「教育の党派性」といふ奇妙な論争にまで発展して行つたのである。

ブハーリンやデボリーンの如く教育哲學的本質論的研究に志す者や、又シユルギンやクルペーナの如く、教育を自然主義的な自己形成の過程と見る教育學者等が「教育の党派性」に否定的態度を取らんとするのは自然であるが、この様な教育思想はブルジョアの理論だとして、メデインスキーの「階級闘争と教育」或はギブロフニコフの「学校死滅論の方法論的基礎と社会的根拠」に於て排撃され、所謂「右翼日和見主義」「左翼日和見主義」といふ様な複雑難解な名称が与えられ、「教育の闘争」はくりかえされてゐるのである。

アメリカに於てもソ連と同様に、「民主主義」をバツクボーンとして文盲撲滅を目指し、義務教育制の徹底に努力した結果、最近に至つて急激に教育の發達を遂げ、世界教育界に占めてゐた英独仏の地位を奪陥して王座に臨んでゐる観があるが、しかし乍らその反面に蔽ふべからざる幾多の思想的波瀾を内蔵してゐるのである。

フランス、ブラウンは最近出版した「教育社会学」の中で、「アメリカ教育界の支柱である、カトリック教会では『人は原罪に対する償いとして勤勞生活をする様に神の宣告を受けてゐる』と説くに対して、宗教革命者等は勞働自体の価値を高揚し、カルヴィン派は『怠惰と無精は真に呪はるべきかな』と説教してゐるが、今日のアメリカの青少年等は、新しい科学思想に刺戟されて、反つてこれ等の思想に混惑され、明朗な遊戲と勞働の精神に対して懷疑的

となつてゐる」といひ、第二次世界大戦以来の多くの統計をかゝげて、青少年の不良化をなげいてゐる。宗教と科学との相剋といふ、中世期以来の古めかしい悩みからぬけきれぬ所へ、新しい革命思想の潛入してゐるアメリカの教育界も決して安泰ではない事を注目しなければならない。

しかもこの二勢波の干渉下にある我が国の現状は、この両周波の高低に影響されて常に波瀾万丈である。しかも最も危険な事はこの二大勢波は決して颱風の波浪の如く我々の感覚には直接に写し出されない、それはあたかも、目に見えぬ氣圧の不連続線が絶えず東西から我が国に進出して来てゐる様なものである。現在我が国の教育界は一応民主主義教育の安定を見てゐる様であるが、それは言はゞ「颱風の眼」の静けさであつて、我が国が絶えず颱風の進路にさらけ出されてゐる事を忘れてはならないのである。然し乍ら、波の干渉はその媒質の振動によつて或は強められ、或は弱められるけれども、その媒質が自ら壊れる事がないならば、それ等の波は元の波長のまゝで通過して行き、媒質は再び元の平靜に復元するものである。

こゝに於て、識者は「教育のバックボーンの確立」に志し、その原理を究明せんとしてゐる。最近唐沢博士は教育の原理を仏教思想に求めんとして「佛教々育思想研究」を著はされたが、それは主として歴史的な教育思想史的研究であつて佛教々理そのものゝ教育学的解釈ではない様である。この様な研究は真に新しい試みで到底簡単に成就出来るものでなく、他日を期して待つ外はないが、今は唯佛教々理を哲学的に考究して、そこに教育の原理の一端緒をうかゞい、佛教が現代の教育にいかなる任務をもつかについて論究して見たい。

二、佛教哲学の教育学的特性

(一)「佛陀」「如来」の教育學的意義

日蓮上人は宗教批判の根拠として所謂「主師親」の三徳を挙げて居られる。今この観点から、現在の三大宗教を判釈するに、回教の神「アラー」は「主徳」に限られ、キリスト教の神ヤーヅェ（ロード、ゴッド）は「主、親」の二徳を具し、佛教の「佛陀」は「主師親」の三徳を具備する、しかも「師徳中心」であつて、こゝに佛教の教育學的特質の端緒がある。以下これを論証せんとするに先立つてまづ、一応「仏陀」の概念を教育學的に略述して見たい。

「佛陀」には十号、三身觀、三徳論その他多くの名義があつて、その研究のみでも汗牛充棟であるが、これは原始佛教より大乘佛教に至る歴史的發展の結果である事は言ふまでもない。しかし、所謂「小釈迦、劣應身」より「久遠本佛」に至る諸概念の中に於て、一貫せる綱格は、「覺道と教主」とであつて、これこそ「佛陀」「如来」の本格であり、久遠教化の主体性である。

「佛陀」(Buddha)は普通「覺者」と釈されてゐるが、それは Budd (覺る)と云ふ動詞の「Perfect Passive Participle」と云ふ梵語独自の用法であつて、言はゞ動作自然完了態であり『「覺る」といふ行を完成した者』の意味となるのである。その「覺る行」とは、やはり, Budd (覺る)と云ふ動詞の・aorist・(梵語獨得の文法用法で、或動作が過去から未完了のまゝ進行してゐる形)である「Bodhi」即ち、「菩提」と云ふ言葉が示してゐる。即ち「佛陀」とは「菩提の道を行じ來つて真理に到達した者」の意味である。「覺行円滿」、「究竟菩提」とはこの意味であつて、他の宗教の神々の様に、いきなり「創造者」として或は又「主宰者」として、世界に君臨し、支配する者ではないのである。

次に又「如来」(Tathagata)は「真如より来れる者」と一般に解されてゐる。しかも「Tathagata」を文法的に分解するならば「tatha-agata」即ち「真如に來れる者」及び「tatha-gata」即ち「真如に行ける者」と両用の意味があるとされ、「如来」と解されてゐる。しかし有名な佛教学者マクドネルの註する如く *gata* は單に「行く」といふ意味でなく *gone and come to* であつて *agata* そのものに來至の意味があるのである。英語にもやはり同じ用法があり、「行」が「往來」の二義に通ずる如く、若し真如の立場から、如来は真如に來ると言うなら、衆生の立場からは如来は真理に行くのであり、若し、衆生の立場から、如来は真如に來ると言うなら、真理の立場からは真如に行くのである。この意味に於て如来は真理に至り、又真理より來るのであつて「如来」と釈されるのは最も要を得てゐるのである。この様に真理に來往するといふ事は自ら真理に至る所の覺道と、その真理から一切衆生を濟度する所の教化との自覺覺他の兩義を有するが故に如来は又「教主」なのであつて、他宗教の如く造物主でもなく又祖神でもなくこゝに佛陀の師徳中心の意義が藏されてゐる。又この様な「真如來往」は、宇宙の当初に於て世界創造の始源ありとする諸宗教の教理とは全く対称をなすもので、「真如來往」には始源なく随つて又終末もない。こゝに、佛教の他の宗教より超出せる、無始無終即ち久遠常住の原理があり、尋常品に説く所の常住不滅にして而も現有滅不滅の教化の根拠があるのである。狂子の救済の爲には方便に滅を示すけれども、亦「尋便來歸」する不滅の教化こそ、「佛陀」の大慈悲、即ち三世に亘る久遠常住の偉大なる教育精神の顯現する所であり、「久遠教化常住教育の主体性」がある。

以上、大体「佛陀」「如来」等の他の宗教と異なる教育的意義を一応瞥見したが、更に一層詳論するに先立つて、他宗教、特に回、基二教の「神格觀」を比較的に一応論究しておく必要がある。

(二) アラーの「主徳」について

イスラムの教典「コーラン経」には、神について九十九種の名義を上げてゐるといはれる。これは回教が三大宗教の中でも最も新しく建立された教義であるが故に、神に関する凡ゆる概念がとり入れられたのだといふ外はない。然し、それ等の神はたゞ名義のみであつて、実は唯一絶対神なるアラーの分身乃至は屬性と考えられるのであるが、これ等の名義の中から決して神の親徳性、神の師徳性を読みとる事は不可能である。

今、コーラン経を繙いて見るに、凡そ百十四スラ (Sura) 品あるが、各品々の巻頭には Bismillah 即ち「大神の名に於て」と冒頭してある。これは一種の頌句であつて、神を讃美する言葉であるが、その意味は「大慈悲の御名に於て」の意味であると言はれる。しかしこの大慈悲の意味は決して、師徳における教化の意味や、「親徳」における情愛の發露ではない。

コーラン経序品第一には、

「神を頌えよ、萬物の主宰、最大慈悲」と神格づけられてゐるが、すぐそれについて、「審判の日の王」即ち佛教の「閻羅法主」に類する神格をもつてよばれ、「われを爾が寛仁なりし者に導け、爾が怒りし者に導かざれ」とある。こゝでいふ萬物の主宰とは Rabbia Laminia 即ち世界の上帝を指すのであるが、語義としては、人、妖精、天使の三種を意味すると言はれる。

この様な「神格づけ」は各品、各章に、各様に説かれてゐて、枚挙に遑がない。

伊牟蘭品第三には、神の性格がかなりうがつた形で表はれてゐる。その第十六章には、神が戦争の時、その使徒マホ

メツトの命令に叛いて退却せる者を罰して曰く、

「汝等（退却して）走り去る時、使徒汝等を後より呼べども、後を顧みず、故に（神は）汝等に禍難に禍難を重ねて酬いたり」と督軍的性格で説かれてあり、又同じく第十七章には

「不幸が汝等に下るや、汝等は何処よりこの禍来るやといふ、答えて言ふ、是れ汝等自ら招く所なり、洵に神は全能なり、と」

といふ句に到ると、その神の全能性が奈辺にあるのか一寸不可解になつて来る。

又女人品第四には、

「人よ、一人より汝等を創り、それより其妻を創り、此の二つより幾多の男女を創りし汝等の神を恐れよ」とあり、更に「汝等の欲するまゝに、二人或は三人或は四人の孤兒の婦人と結婚すべし（但し四人を越える事を得ず）」とあるのは有名な事であるが、こゝでも決して神が親徳をもつてゐるのではなく、唯創造者としての絶対權威が示されてゐるのに外ならない。

又雷電品第十三には

「其上帝に従ふ者は最も優れたる報償を与へらるべし、されど従はざる者は、たとい全世界における何者をも否更により多くを有すとも償としてすべてそれを与えるべからず、此等は恐るべき清算に致さるべし、その行く処は地獄なるべし、不幸なる床なるべし」

即ち信する者には仁慈を与え、信ぜざるものは徹底的に懲罰する主権者である。

故に同じく雷電品才十三の第二章には

「神の外に其の創造りし者を神の伴侶となすべきや、言へ、神は万物の創造者なり、そは唯一の勝利の神なり」と即ち絶対に他の神を排し、絶対に不信を懲罰する神であつて、師徳や親徳を具していない事は充分理解出来るであらう。しかし、周知の如く、イスラム教はその教義の根源を多くキリスト教に負うてゐるので、その神に干する觀念については、キリスト教の神についての理解から出發しなくてはならない。

(二) エホバ神格の「主父二徳」性について

キリスト教の神が造物神であり、世界主宰者である事は、旧約聖書の創世記に明らかであつて、言はゞ「主徳」の神であり、更に後述する如く、後には「父徳」をも具して来るが、「師徳」は明らかにされない。則ち「天主」或は「天にまします我等の父」ではあつても、「教主」ではないのであつて、そこに佛教との根本的相違がある。否、むしろ「衆生」である所の「人民」の神に近づかん事を禁じてゐる神であるから、全く佛教の「覚道」とか「成佛」の思想とは正反對なのである。

有名な「禁断の果実」や「バベルの塔」の物語は、特にこの点が強調されてゐる個所であつて、一般に「禁断の果実」の物語は、佛教の無明煩惱に当る「原罪」の物語として解釈されてゐるが、少し深く原書を精読すれば判る様に、決してその様な「無明煩惱の果実」ではない。むしろその反対に盲目を開き、善悪を知る「智慧の果実」であり不老不死の壽命を与える「長壽の果実」である。則ち創世記の第三章には

「エホバ神曰ひ玉ひけるは『視よ、^{かのひと}夫人等、我等の一の如くなりて善悪を知る、然れば、恐らくは、彼其の手を舒

べ、生命の樹の果実をも取りて食い、無限^{かぎりなく}生きん』と、エホバ神、彼をエデンの園より出し、其の取つて造られたるところの土を耕さしめたまへり」（創世記第三章、二二、二三節）

と記されてゐる如く、神はエバやアダムがこの「禁断の実」を食つて、善悪を知り、不老長壽の壽命を得て、「神の如くなる事」を禁じてゐるのである。随つて、創世記第六章に語られてゐる人壽百二十歳の限定も、人が神の永遠性を犯す事を禁じたのに外ならない、即ち、

「エホバいひたまひけるは、我靈永く人と争はじ、其は彼も肉なればなり、然れど彼の日は百二十年なるべし」

（創世記第六章三節）

とあるに、明白なる如く、神は決して人民を教化して、神の世界に至らしむる者ではなく、むしろ、人民からその靈命の永遠性を剝奪せるものである。この様な「神人隔絶」の思想は有名な「バベルの塔」の物語りについて一層明らかにされて来る。

創世記第十一章に語られてゐる「バベルの塔」については、今原文を挙げて説明するには、あまりに長文であるので、その煩をさけて、取意的に記述するなら、「地上の人民共の言語が共通であつたが為に、各共謀して、シヌアールの地に町を造り、更に天国に至る高い塔を築き、天に登つて皆一緒になり、再び地上の各地に散乱する事のない様にしたいと協議した。エホバはその町と塔を見て、その天国に登らんとする不遜を惡み、その様な共謀をするのも結局は言葉が一つであるからだと考へて、人民共の「言葉を淆して」互に言葉を通ずる事が出来ない様にし、人民共をシヌアールの地より世界の、全地の表面」に散らしたのである。（未完）

（紙数の關係上以下次号に移す）